



かじや通信

第47号

発行日：令和3年11月吉日

発行：かどや保存会

発行責任者：寺田 直喜／編集：廣野 克子

「コロナ疲れの心もほっぺり！」 羊毛フェルトの作品展

十月の展示は「メグとみんなの」「動物園」と題し、メグこと園田恵さんが講師を務める羊毛フェルト教室の生徒九人とメグちゃんの作品展だった。

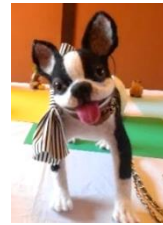
メグちゃんの作品展は平成三十年に初めて実施し、展示された「ツメカワソウやハムスター、ミニぶた、うさぎ等が「かわいー」「癒される」等々、大好評となり、翌年四月から「めぐ倶楽部」と名付けた羊毛フェルト教室が始まった。

昨年一月にもメグちゃんの作品展は開催されたが、生徒さんたちの作品が展示されるのは今回が初めてだ。作品は百点ほどのぼり、教室で習った「ラッコ」や「ペンギン」や「パンダ」、「三三」猫等がずらりと並んだ。

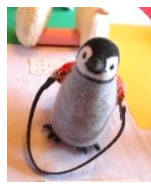


毎回メグちゃんの指導で同じものを作るのだが、出来栄はそれぞれ異なっており、見比べる楽しさもあつた。また、応用編では、キノコ畑や伊勢土ビの入ったおせち、縁を使ったアサギマ

タマや赤富士等も披露された。メグちゃんの作品は約六十点で、りすやハムスター、うさぎ、ペンギン、犬、フクロウ、はりねずみ、コアラ等の動物に加えて、アニメキャラクターを題材にした人形も登場した。動物の中には「知恵をためるように」とランドセルを背負ったペンギン等、メグちゃんならではの工夫が光っていた。



「何時間でも見ていたい」「見ているだけで、心がほっこりする」等々、コロナ禍で委縮したお客様様の心を優しくほぐしてくれる楽しい展示だった。



「知恵をためるように」とランドセルを背負ったペンギン等、メグちゃんならではの工夫が光っていた。



羊毛を針でつつく作業が続くが、教室はいつも笑いの絶えない楽しい雰囲気が漂っている。

《布が輝く三人展》

十一月は「布でつながる仲良し三人展③」と題し、草木染シルク手織りの小林宜子さん、古布創作服の福田



手織りした布で、スカーフやマフラー、チュニックやバッグ等を作っている。やわらかで明るい色調の作品が特徴だ。

雍子さん、指輪とネックレス・創作服・一閑張りを展示した小野洋子さんの作品展が、昨年に引き続き行われた。三人は、伊勢市在住で旧知の仲だが、布を使った作品は三人三様で、その違いが見学者を楽しませた。小野さんの本業はジュエリー・デザイナードが、洋裁も得意で、大島や紬等、きもの古布を使った「コートドレス」やチュニック、スカート等にも斬新なセンスが光っていた。福田さんも古布を使ってベストやジャケット、チュニック等を出展したが、圧巻は藍の木綿を使った作品だった。異なる生地をパッチワークで組み合わせたり、随所に赤や白の糸を使った刺し子でアクセントをつけた。福田さんならではの、粋でモダンな洋服に生まれ変わっていた。小林さんは、茜やマリーゴールド、山桜、お茶等で糸を染め、その糸を手織りした布で、スカーフやマフラー、チュニックやバッグ等を作っている。やわらかで明るい色調の作品が特徴だ。

なかまちの過去と未来を考える かどや塾、ス々に開催

かどやでは、コロナ禍での密を避けるため、セミナーやコンサート等の開催を自粛していたが、非常事態宣言が解除となった十月、五月月ぶりにかどや塾が再開された。

テーマは「なかまち」(鳥羽三丁目～五丁目)に関連したもので、十日には「商家の土蔵を開いたら」鳥羽の昔が見えてくる」と題して鳥羽市文化財専門員の野村史隆さんが講演。十七日には合同会社なかまち代表の濱口和美さんが、「躍進するなかまちの今」と題して、町おこしに奮闘するなかまちの活動を紹介した。

《かつての鳥羽を垣間見る》

野村さんは、かつて鳥羽三丁目



(旧：中之郷)で小間物屋を営んでいた柴山商店の土蔵に保管

されていた道具類を紹介した。同家の蔵は今年解体撤去されたが、野村さんは解体前に所蔵品を調査し、文書化する作業を担当した。

かどや塾では、柴山家の土蔵に残されていた看板や家具等を写真で紹介し、鳥羽が港町として栄えていた当時の模様に触れた。また、絵葉書や帳簿付け等に使っていた大きなすずり、携帯用の提灯等は持参して、今では珍しい物品を参加者に披露した。

また、大正六年十二月二十日に起きた鳥羽の大火についても、当時の新聞記事を用いて解説。錦町(現鳥羽三丁目)の旅人宿で出火した火は、強風に煽られて錦町と中之郷の民家百八十五戸と倉庫・納屋等七十五棟が消失する大惨事だった。柴山家の蔵には、火災で焼けたのだと思われる銅貨の塊も残っており、当時を物語る貴重な証拠として紹介した。参加者は、鳥羽三丁目の方々が多く、先祖が暮らしたかつての鳥羽に思いを巡らせ、参加者同士の会話も弾んでいた。

《未来の賑わい作りに奮闘中》

現在、なかまち



と呼ばれている鳥羽三丁目～四丁目界隈は、昭和の半ばまで個人商店が軒を連ね、大勢の人が行き交う賑やかな町だった。鳥羽なかまちは当時の賑わいを取り戻そうと平成二十六年に発足し、民間主体の

町おこし運動として県内外からも注目されている。その中核となる合同会社なかまちは、地域活性化を図るため、空き家対策や移住定住の促進等を積極的に推進している。かどや塾では濱口さんが鳥羽なかまち会の誕生から現在の活動の一端を紹介してくれた。活動拠点のクボクリは、久保クリーニング店が廃業時に、オーナーの久保さんご夫妻が「頑張っているなかまち会の皆さんのお役に立てれば」と提供してくれたもの。なかまちは、この地区に店舗を増やすことも目標として活動してきた。その結果、クボクリ一階

には、堺市から移住しチャンポンと炙り鯖寿司の名店として一躍人気店となった「花清水」と、「コーヒーショップ」Nカフェが営業しており、二階のシェアオフィスもほぼ満席状態だ。クボクリの三軒隣には明治時代に建てられた蔵を展示スペースにするため芝浦工業大学の生徒さんの協力を得て改装が行われている。地域おこし協力隊一期生の佐藤さんは、元理髪屋の店舗を改装し、おにぎりカフェ「うさぎのしっぽ」を開店。海産物の燻製で人気の魚寅は一階をレンタルスペースに改装し、会議やイベントに活用されている。空き家となっていた住宅もゲストハウスとして活用する準備が進んでおり、近々開業予定だ。また、「人がほとんど通らないのに、この町を活気づけよう」と頑張っている姿に感銘を受けたこと支援を申し出てくれる企業もあり、現在協議が進んでいる。

シェアオフィスやレンタルスペース等の画期的なアイデアに加え、メンバーの幅広い人脈を生かして、日々賑わい作りに奔走する活動には、地元参加者から期待を込めた大きな拍手が送られた。

万葉の花を探して野道を歩く

～野の花と万葉の会特別編

九月の「野の花と万葉の会」は緊急事態宣言のため中止となったが、十月は「万葉の和歌」とともに歩く「加茂里山散歩道(秋)」と題して行われた。今回は、参加者の一人が講師のカヨさんに声をかけ、鳥羽市加茂地区の農道を散策した時に出会った花々を取り上げた。まずは、その時のカヨさんの感動を紹介しよう。

『野の花見てある記』

『ナンバンギゼル(思い草)』

「ナンバンギゼルが咲きましたよ」
九月某日に届いた一本の電話で、翌日には秋の草花や木の実の下がった加茂の農道を、その方の案内で歩いていました。

背丈は十センチくらい、形はその名の如く煙管(キセル)に似て、淡い紅紫をたたえた花が少しうつむいて…。その姿から万葉時代には『思い草』と呼ばれていたのが実感が残ります。

道の辺の尾花(おはな)をみるまき(まき)が下の
思い草 今更々に何か思はむ

(巻十 二二七〇)

はるか千古の昔から、ススキなどの根もとに毎秋咲き続けてきた「花と、この秋にやつと出会えました！」(カヨ)



会場にはカヨさんが手作りした大きな地図が張り出されていて、散策した農道と、そこで出会った花々の名が書きしるさされていた。会の冒頭で散策に至った経緯を説明し、万葉集に詠まれた農道で出会った花々の和歌とその意味を解説した。参加者は、鳥羽市内に咲いている花々を万葉人も愛でていたことに感激し、「来年はぜひ、その道を歩きたい」と熱望する声があがった。また、秋の七草を詠んだ歌も紹介し、万葉人が秋の七草に寄せた思いにも触れた。参加者たちは、時空を超えて、万葉人と秋の風情を共感したようだ。

ちなみに、今回の散策で取り上げられた花は、思い草(ナンバンギゼル)、月草(ツルクサ)、しばくさ(チカラグサ)、くそかずら(ヘクソカズラ)、あぐさ(オモダカ・クログワイ)、うまら・うばら(ノイバラ)、

知左(エゴノキ・チシヤノキ・ロクログ)の七種。あなたも道端の花に気を留めてみませんか。

強風にも負けず 待望のコンサート再開

鳥羽なかまち会が地域活性化のために実施している「なかまち竹あかりマーケット」が十月二十三日に開催され、かどやもマーケットに合わせて一年振りにコンサートを行った。会場は密を避けるため館内ではなく、米蔵前の中庭を予定していたが、当日は朝から強風注意報が出ており、午前中に行ったりハーサルでは楽譜が飛んだり、譜面台が倒れたり。そこで急遽、出演者は庭に面した座敷で演奏することになった。客席は強風吹きすさぶ庭だったが、出演は昨年同様、おばさんバンドのかどやゼンザース、小唄教室のつくしんぼ、マーちゃんのオルガン演奏、オカリナ教室タコジーズの皆さんに加え



オカリナ教室の皆さん

らに女性コーラスなつめとジャズの宮崎義明トリオも参加し、プログレアムはバラエティ



小唄

に富んでいた。お客様からは「普段聴く機会の少ない三味線やオカリナまで聴けて楽しかった」というコメントもいただいた。

「なつめ」は市民コーラスはまおぎの有志六人で急遽結成したグループだ。はまおぎは、コロナ禍で練習もままならず、歌いたくてウズウズしていた仲間が集まり、短期間でしっかり仕上げている事なハーモニーを披露した。



女声合唱なつめ

トリの宮崎バンドの頃には、日暮れも近く風の冷たさが増してきたので、お客様もついに館内に移動した。コロナ以前はしばしばかどやでジャズ演奏も行われていたが、久々にご機嫌なジャズの調子が響き、大盛況だった。



なかまち情報
チョコレート工房
近日オープン!

なかまちの躍進ぶりを1ページで紹介したが、なかまちにまた一軒魅力的な店が誕生する。チョコレート工房「アトリエ・アンシエ」が年内に開店予定だ。

店長のナオミさんは、今年一月にかどやで「ナオミのおもちゃ箱」と題して油絵とダンボールアートの展示に加え、手作りチョコレートを販売したあのナオミさんである。

ナオミさんは、一時期伊勢市中でチョコレート工房を営んでいたことがあり、いつか地元で再開したいと考えていたそう、その夢をなかまちで叶えることになったのだ。



ナオミさんが作るトリュフと生チョコレートのレシピは、十五年かけて作り上げたそう、原料には高級なフランス製のクーベルチュール(注)を使っている。

□溶けのよい滑らかな味は、あなたを虜にすること間違いなしだ! かどやから徒歩3分なので、かどやへお越しの際は、「アトリエ・アンシエ」にもお立ち寄りを!

(営業日)日・月・火・水

注・クーベルチュールはカカオ分35%以上、カカオバター以外の代用油脂は使われていないという国際規格を満たした製菓用チョコレートで、カカオバターを多く含むので口どけがよい。

コンサートの舞台裏

コンサートの音響はユウジさんの担当だ。コンサートは午後三時からだが、午前十時過ぎからリハーサルをするため、ユウジさんは八時過ぎから、一人でせつせと準備を始めてくれた。しかし、リハーサルが始まるやいなや、強風で楽譜が飛ばされて練習どころではなかった。準備の大変さを感じる心になり、ユウジさんはまたまたせつせと機材を移動し、セッティングをしてくれた。お陰でどのグループも安心して演奏することができたのである。

さて、コンサートは無事終わり、皆で片付けをしていると、ユウジさんが「オカリナの先生のと違います?」と、玄関前に置き去りにされていたバッグを持ってきた。先生は所用があり急いで帰ったのだが、バッグには楽譜など大事なものが入っていた。と、そこにジャスピオアートのキミヨさんが通りかかき「先生の家は近所やから届けてあげる」と一件落着となった。

このようにコンサートの裏側では、色々なことが起こっていたのよ。

◆◆◆ 貸部屋の案内 ◆◆◆

かどやを有効に活用していただくため、一部の部屋を貸部屋として貸し出しています。茶話会や勉強会、展示会などに活用ください。

詳細は、かどやへ。

電話〇五九九二五八六八六

時間区分 部屋	午前	午後	全日	冷暖房設備 利用料
	10時~12時	13時~16時	10時~16時	
座敷南(10畳)	500円	600円	1,100円	500円
座敷北(8畳)	400円	500円	900円	—
仏間(6畳)	300円	400円	700円	—

- ・営利目的の場合は、料金表の10割増しとなります。
- ・鳥羽市民または市内勤務者以外の利用は、料金表の5割増しとなります。
- ・許可された利用時間を超過する場合は、割増料金が発生します。
- ・冷暖房費は、全日使用の場合は2倍になります。

かどや保存会 令和3年度会員募集中!

かどや保存会は、歴史的文化的財である「鳥羽大庄屋かどや」の保存ならびに効果的な活用・運営をめざして活動を続けており、当会を支援して下さる会員を募集しています。

平成30年度は会員数が351名に達しましたが、残念ながら以後毎年減少しております。しかし、コロナ禍にも関わらず、令和3年度は11月15日現在で259名の方から継続のお申込みをいただきました。皆様からのご支援を心より感謝いたします。コロナの収束にはまだ時間がかかるものと思われそうですが、感染防止対策を強化しつつ、皆様の憩いの場所となるよう、これからも日々努力を重ねてまいります。手続きがまだの方も引き続きご支援いただきますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

令和3年度(令和3年4月1日~令和4年3月31日)の年会費(1口2,000円)は、継続・新規を問わず、以下の方法で納入してください。

(1)手渡し: かどやにお越しいただき、直接事務局にお支払いいただく。

(2)銀行振込: 郵便局 普通 かどや保存会 00850-4-151751